

●**タイトル**——江戸庶民の人生訓「親父の小言」に学ぶ

●**各回概要**

【1日目】 嘉永5年版「親父の小ごと」81カ条の発見の経緯／昭和3年、大聖寺「親父の小言」45カ条との違い

→ 嘉永版81カ条に、昭和版45カ条は全て含まれ、教訓の傾向も同様…など、全体の概要について。

【2日目】 「親父の小ごと」の対人関係の心得

→ 人の気持ちを推し量る小言や、弱者を労る小言を味わい、親父の人情を知る。

【3日目】 「親父の小ごと」の危機管理の心得

→ 「地震、雷、火事、親父」と言うが、天災(特に火事)などの危機管理や生き抜く知恵を「小言」に学ぶ。

【4日目】 「親父の小言」が現代人に伝えるメッセージ／平成版を作ろう

→ 「小言」が強調した「人様」という考え方は、江戸の「もてなし」や「ふるまい」に通じる心。新時代の小言も面白い。

【1日目】 嘉永5年板「親父の小ごと」81カ条の発見の経緯／昭和3年、大聖寺「親父の小言」45カ条との違い

約1年前、1冊の和本がネットオークションに出品されました。

商品名には「和本、江戸期教訓書、「親父の小ごと」一冊」とあり、江戸末期の嘉永板とのこと。

写真を見ると「嘉永5年（西暦1852年）」の刊記が確認できました。

「親父の小言」と言えば、「火は粗末にするな」「朝、機嫌をよくしろ」で始まるお馴染みの格言集です。皆さんも、居酒屋の湯呑みや蕎麦屋の箸袋、あるいは、観光地の土産物など、幾度となく目にした覚えがある事でしょう。

その「親父の小言」とは、恐らく別物だろうと思いましたが、同じ書名の出版物が江戸時代にもあった、この事実だけでも十分面白いと感じて入札し、運良く落札できました。

数日後に届いた原本を見ると、本文は全81カ条で、末尾に教訓の和歌2首を添え、最後に「嘉永5年」の年号と「施主、神田住」、つまり、江戸神田の住人が施しの為に出版したことを示す記載がありました。

驚いたことに、本文冒頭は「火は粗末にするな」「朝、機嫌をよくしろ」という聞き慣れた文句。こうなると、今日流布する「親父の小言」とは、どこが同じで、どこが違うのか、また、江戸時代の文献がほかにもないのかが気になりました。

まず第一に、現代と江戸の「小言」の違いです。

現在の「小言」も、箇条数や文言の異なるものが色々と出回っていますが、そのルーツは、昭和3年（1928年）に書かれた45カ条です。

それは、福島県浪江町の大聖寺——福島第一原発事故の影響で、現在は福島市内に避難中ですが、その大聖寺のご先祖の暁仙和尚が書かれた45カ条です。

それを印刷して信者に配布していたものが、いつしか地元の土産物となり、昭和30年代から一気に全国へと広がったそうです。

ただし、その印刷物の最後に「親父生前中の言葉を思い出して書き並べました」と書かれており、45カ条は記憶にしたがって復元したものと言います。

この昭和版45カ条に対して、嘉永板は81カ条ですから、例えば「子供の頭を打つな」「女房にだまされるな」「喧嘩をするな」など昭和版には欠落した箇条が数多くある一方、81カ条には45カ条の内容が全て含まれています。

また、嘉永板の「恩はどうかして返せ」が、昭和版では「恩は遠くから隠せ」となっているように、文言や箇条配列の違いも散見されます。

「かへせ」と「かくせ」は、旧仮名遣いのくずし字では字形も似てくるため、転写や伝承の過程で変化した可能性もありますし、記憶違いによるものかもしれません。ただし、81カ条が45カ条に減ったのは、意図的な取捨選択の結果と見るべきでしょう。どちらにせよ、81カ条から45カ条が派生した可能性が極めて高いと思われます。

それでは、江戸時代の『小言』はほかにないのでしょうか。

古典籍の主な所蔵先を示した『国書総目録』を見ると、

成田山仏教図書館に、『親父の小言』の写本が存在することが分かりました。

インターネットでも蔵書検索ができるので確認すると、その写本が確かにありました。

幸い、大聖寺の45カ条を紹介した書籍も架蔵されており、一石二鳥でした。

余談ですが、自転車用のナビで調べると、

自宅から仏教図書館までは往復約150kmで、日帰りサイクリングが十分可能です。

そこで、天気の良い7月初旬に、嘉永板の原本を持参し、妻と自転車で現地に赴いて調査をしてきました。

結局、仏教図書館の写本は、江戸末期までに出版された教訓書10点を写したものでした。

その一つが「親父の小言」で、本文は嘉永5年板と同じ81カ条です。

正確な書写年代は不明ですが、他の教訓書の内容から、

江戸末期から明治初年にかけての写本と推定されます。

したがって、江戸時代の「親父の小言」は、今のところ、嘉永5年板の81カ条以外には存在しません。

さらに古いものが見つかる可能性は十分ありますが、81カ条と同系統のものと考えられます。

とにかく今回の発見で、『親父の小言』は、

昭和3年を約80年遡る嘉永年間には成立していたことが明らかとなったのです。

この情報をマスコミ数社に伝えたところ、ある新聞社がいちはやく取り上げてくれ、

東京版では「親父の小言、起源は江戸」、

大阪版では「ガミガミ親父、江戸にいた」の見出しで報道していたのが印象的でした。

さて、嘉永5年板『親父の小ごと』は、思いつくままに81カ条を列挙したようで、

関連する箇条が前後に分散しがちです。

また、嘉永板と昭和版とでは箇条数が大幅に異なるため、各箇条を分類・整理してみました。

すると、両者の小言の構成比は大差ないことが分かりました。

最も多いのが対人関係の小言、例えば「人に腹を立たせるな」「人に恥をかかせるな」といったもので、嘉永板が20%、昭和版が22%。

2番目は家業・家政関連の小言、例えば「身の出世を願え」「家業は精を出せ」などで、

嘉永板が19%、昭和版が18%。

3番目は危機管理に関する小言、例えば「万事油断をするな」「火事の覚悟をしておけ」などで、

嘉永板が16%、昭和版が11%で、嘉永板がやや高くなっています。

以下、4番目が吉凶・信仰関係、5番目が健康・養生・飲食など、

6番目が己を修める修己・修身という順で、4番目から6番目はそれぞれ12%前後です。

そして、最も少ない7番目が、家族・家庭関係の小言で、嘉永板も昭和版も9%でした。

分 類	小言の例	嘉永5年・81力条	昭和3年・45力条
①対人関係	人に腹を立たせるな 人に恥をかかせるな	20%	22%
②家業・家政	身の出世を願え 家業は精を出せ	19%	18%
③危機管理	万事油断をするな 火事の覚悟をしておけ	16%	11%
④吉凶・信仰	神仏を祈れ 不吉を言うな	14%	13%
⑤健康・養生・飲食	大酒を飲むな 寒気の時、湯に入るな	12%	13%
⑥修己・修身	人を羨むな 何事も我慢をしろ	11%	13%
⑦家族・家庭	家内笑うて暮らせ 女房の言う事半分聞け	9%	9%

以上の7分類では、「親父の小言」は対人関係の心得が最も多く、全体の2割を占めます。

その3分の1は、老人・病人・困窮者・身寄りのない人など弱者に対するものです。

この点は「小言」の大きな特徴です。

2番目の家業・家政の心得が多いのは当時の教訓書の通例です。

また、3番目の危機管理も家業・家政と関連しますが、

特に、火事や天災に対する心得は「小言」の強調点の一つです。

その一方で、6番目の修己・修身や、7番目の家族・家庭の心得が極端に少ない点が目立ちます。

当時の教訓書では、むしろこれらに比重を置くのが一般的です。

このように、「親父の小言」は、対人関係の箇条が際立っています。

そこには、世間の人を「人様」と呼ぶ精神が息づいているように思います。

「小言」を読むと、私はいつも評論家の草柳大蔵さんの逸話を思い出します。

石屋に生まれ育った大蔵少年が中学3年のある夏の日。

これから銭湯へ行こうというのに、わざわざ父親が井戸端で行水をして、体を綺麗に拭いていました。

それを見た大蔵少年は、「銭湯へ行くのに、どうして体を拭くの。それは不合理じゃないの」と言いました。

すると、父親は「銭湯で着物を脱いで汗臭かったら、人様の迷惑だろうが！」と叱ったそうです。

私もそうですが、現代人の多くの人が、大蔵少年と同じ発想になるのではないのでしょうか。

そう言えば、最近「人様」という言葉もあまり聞かなくなりました。

ややもすると、「人様」より「俺様」の時代かもしれません。

江戸時代に庶民道徳を説いた「石門心学」も、

「俺が俺がが増長すると、一生ダメな人間になる」と戒めています。

他人に対する「気遣い」や「もてなし」ができて、初めて一人前の大人と言える。

「小言」の本命は、ここにあったようです。

それらの小言の中味は、明日^{みょうにち}お話ししましょう。

それでは、今宵^{こよい}はこの辺で。ごきげんよう。

【2日目】「親父の小ごと」の対人関係の心得

江戸生まれの「親父の小言」81カ条。その2割に当たる16カ条が対人関係の小言です。
当時の一般的な教訓書と比べても、「親父の小言」は、対人関係のウエートが突出しています。
今日は、それらの小言を少し詳しく見ていきましょう。

第2条「朝、機嫌をよくしろ」。その次の第3条に「朝早く起きろ」とあります。
朝から機嫌を良くするには、やはり朝起きが大切。「一日の計（はかりごと）は朝にあり」と言います。
ちなみに、江戸後期の教訓書『福相になるの伝授』は、こんな事を述べています。

笑顔は即、福分・幸運である。悪い事は笑顔ではできない。
喧嘩・口論、短気、嫉妬や焼き餅、損も貧乏も、笑顔ではできない。
邪見・強欲も、病気も死も、笑顔ではできない。
そのほか、笑顔でできる悪事は何一つない。だから、いつも笑顔を心掛けよ。

小言親父も、「朝から機嫌良く、笑顔で過ごせば、悪も遠ざかり、福が訪れる」と言いたいのでしょう。

さて、第10条以下は、対人関係の小言のオンパレードです。
第10条「人に腹を立たせるな」、第11条「人に恥をかかせるな」、
第12条「人に割を食わせるな」、つまり、人に損をさせるな、
第13条「人に馬鹿にされている」、一つ飛んで、第15条「利口は利口にしておけ」、
第16条「年寄りを労れ」、第17条「恩はどうかして返せ」という具合です。

今挙げた数カ条はいたって簡潔明瞭ですが、実行するのは容易ではありません。
人を怒らせない、人に恥をかかせない、人に損をさせない。
そして、人からは馬鹿にされている、利口ぶる奴は利口にさせておけという訳です。
これを逆転させると、人を喜ばせ、人の栄誉を讃え、人の利益を優先し…ということですから、
常人（じょうじん）には、到底できる事ではありません。

少し脱線しますが、以前、インターネットを見ていたら、ある高校生が、
「親バカはいいが、バカ親はダメ。教師バカはいいが、バカ教師は困る」という書き込みをしていて、
「うまい事言うもんだな」と感心したことがありました。

諺に「自慢、高慢、馬鹿の行き止まり」というのがあります。
己を誉め自慢する者こそ本当の馬鹿、一の馬鹿と昔から言われてきました。
その反対に、馬鹿になって生きた方が無難だという「馬鹿果報^{ばかかほう}」という諺もあります。
江戸中期の『風俗文選拾遺^{ふうぞくもんぜんしゅうい}』という本も、「馬鹿果報」という言葉を引いて
「知恵ある者に真の馬鹿が多く、知恵有る者は知恵によって滅ぶ」と戒めています。

「自分が利口だと思っている奴は放っておけ。そんな「利口馬鹿」はそのうち誰も相手にしなくなる。
そんな小利口者^{こりこうもの}にはなるな」と教えたのが、第15条の「利口は利口にしておけ」だと思います。

それから第17条の「恩はどうかして返せ」。

これは昭和版では「恩は遠くから隠せ」となっていますが、江戸板の読み違いのような気がします。

ともあれ、江戸時代の教訓書の多くが

「自分の恩は忘れても、人から受けた恩は忘れてはいけない」と教えています。

中でも『渡世肝要記』という教訓書は、「恩返しをしようと思うと恩を忘れやすい。

だから、恩をいつまでも忘れるな」と説いています。

さて、この後も、対人関係の小言が点在します。

第30条「病人は労れ」、第31条「難渋な人には施せ」、つまり、困った人を助けろ、

第37条「義理を欠くな」、第41条「喧嘩をするな」、

第45条「世話焼きになるな」、第71条「身寄りのない人を労れ」、

第72条「小商い物を値切るな」、つまり、零細な商いを値切るな、

第80条「人の気をもむ時、力を付けてやれ」という具合です。

『小言』には「労れ」という言葉が3回も登場します。

老人・病人・身寄りのない人を労れと言い、貧しい人には施し、人には義理を欠かず、人と争わず、かといって必要以上に人にお節介を焼くなとも言い、

さらに、小商い物、零細な商売を値切るような不人情はやめよと戒めています。

先に「人に割を食わせるな、損をさせるな」と言い、

ここでも、わずかの日銭を稼ぐ商売に、損をさせるなと繰り返しているのです。

元値を割るほど酷く値切ることを「血の垂れるほど値切る」と言います。

『現銀大安売』という教訓書も、このような不人情を戒め、

「我が身も、他人も、少しばかりの利益がなければ、世渡りできない。

相手に損をさせるほど値切れば、売りに来る商人もいなくなり、

結局は、みんなが立ち行かなくなるだけだ」と教えています。

第71条「身寄りのない人を労れ」。身寄りのない人とは、一言で言えば「鰥寡孤独」のことです。

つまり、伴侶のいない老人、親のいない孤児、子のいない老人など、独居する人々です。

「四書」の一つ『孟子』は、「これら身寄りのない人達は、世の中で最も苦しむ人々で、

しかも、その苦しみを聞いてくれる相手がいない、気の毒な人だ」と述べています。

小言親父は、「このような人々には情けをかけてやれ。情けは人のためならず、いつかは人に助けてもらうこともある。我が事と思って、出来るだけ助けてやれ」と言いたいのでしょう。

第80条「人の気をもむ時、力を付けてやれ」も同様です。

落胆する人がいたら、慰め、励ましてやる。

このように、弱者に対する労りの精神は、「小言」の随所に見られます。

『苦楽さとし草』という教訓書に、次の一節があります。

急に必要な物ができた時に、その算段が付かないのは、
その人が情けを知らないか、あるいは、かつて他人に難儀があっても他人事^{ひとごと}として関わらなかったからで、
こういう人は、自分が大変な時は、急に苦しみ、誰にも頼れない気持ちになるものだ。
逆に、日頃から情け深く、人の難儀を見ると、我が事のように思って、救い助ける人もいる。
このような思いやりのある人には、誰もが恩義を感じるため、
その人に思いがけない災難があっても、必ず周囲が助けるものだ。

そして、この本でも「情けは人のためならず」という言葉を引いています。
困った時に助けてもらえないのは、自分も人助けをしてこなかったから。
つまり、他人の不人情ではなく、自分の不人情。

だからこそ、第37条「義理を欠くな」が大切なのです。
諺に「義理と禪は欠かされぬ」と言います。
義理は、禪のように1日も欠かしてはならないという、男子の信条を示したものです。

こっちに義理、あっちに義理と、義理だらけになって、
洒落ではありませんが、生活もギリギリになれば、
諺の「義理ほど辛いものはない」ということにもなるでしょう。
それでも、「義理を張る」のが男の真っ当な生き方だと「小言」は教えているのです。

『論語』に「徳、孤ならず、必ず隣あり」という言葉があります。
人徳がある人は決して孤立することはなく、良き理解者や協力者が必ず現れるという意味です。
小言親父も、人は1人では生きてはいけない、だからこそ、義理・人情が大切だと力説したのでしょう。

次回は、小言親父の危機管理、リスクマネジメントについてお話ししましょう。

それでは、今宵^{こよい}はこの辺で。ごきげんよう。

【3日目】「親父の小ごと」の危機管理の心得

江戸板も、昭和版も、「親父の小言」は「火は粗末にするな」の一条から始まります。
江戸時代の生活を思い起こしてみると、
火は、まず煮炊きの燃料となり、照明になり、暖房にも使われました。
そして、人間生活には欠かせないことから、火は儀式的の象徴となり、信仰の対象にもなりました。

享保年間に出版された『冥加訓』も、
このような火の効用に触れた上で、こう述べています。

**火の恩も顧みず、油を部屋のあちこちにともし、灯りを煌々とつけ、
常夜灯のほかに蠟燭もともすような「灯りの欲」を食れば、
ご利益が尽きるのは当然である。
一人ひとりの無駄はわずかでも、世界全体では大変な規模となる。
夜は急用が無ければ早寝・早起きし、日光を最大限に活かすのが天の道に叶うものだ。**

太陽光を中心にした生活でエネルギーを浪費するな、
1人ひとりはずかでも世界全体では莫大なものになる。
300年前のこの指摘は、まるで現代の省エネキャンペーンのようです。

火に関する箇条とともに、火事に関する箇条も多く、
第50条「火事の覚悟をしておけ」、第51条「火事には人をやれ、内を守れ」、
第52条「風吹きに遠出をするな」と3カ条も含まれています。

まず、火事の覚悟とは、どんなことでしょうか。享保年間の『^{あきんどやわらう}商人夜話艸』の例を紹介しましょう。
第一に、普段から「火の用心」に気を付け、毎晩、主人自らが火の元を点検して回る。
火の用心だけは、人任せにしてはならない、と説いています。

第二に、家の規模に関係なく、出火時の役割分担を^{あらかじ}予め決めておく。
そして、遠方の火事で非難の必要がない時でも、実際に何回か非難訓練をして、
それぞれの動作に熟練しておけ、と述べています。
単に役割分担を口で指示しただけでは、出火時に何の役にも立たないため、
日頃から実地訓練を心掛けよと言うのです。

以上のほかにも、
「手間でも、商品のほとんどを、毎晩、土蔵に搬入する」
「帳簿類や重要書類も優先順位をつけて箱に入れ、土蔵に保管する」
「土蔵がない家なら、方角が異なる知人の土蔵数カ所を、緊急時の保管場所として頼んでおく」
「少し離れた地域に、出火時の助っ人数名を、予め頼んでおく」など、様々な助言をしています。

第51条の「火事には人をやれ、内を守れ」というのは、
出火時に、消火活動の応援要員を出すとともに、一家の安全も確保しろ、ということです。

先ほどの『商人夜話艸』も、まず出火場所を確認し、
近ければ、帳箱に重要書類を投げ入れて、老人など足腰の弱い者とともに、
真っ先に非難させろと述べています。
火の手が近いとすぐに人だかりができ、逃げ場を失う危険があるからです。
その次に、土蔵の中に諸道具その他を押し込めて、土蔵を締めた後、
さらに土蔵の窓や扉の隙間に粘土で目塗りをし、耐火性を高めるように注意しています。

江戸後期の『我身之為』という教訓書によると、まず出火場所と風向きを確認する。
出火場所の風下で大風なら、家屋全焼も覚悟し、早々に老人から順番に非難させる。
主人は落ち着いて指示を出し、一家全員に怪我や過ちがないように資財・道具を蔵へ運ばせる。
見知らぬ者が火事見舞いに駆け付けても中には入れない、これは火事場の泥棒対策です。
そして、防火協力者には屋上での火の粉払いや、消火用水の運搬など、外回りの役を頼み、
蔵への道具搬入は家の者に任せる。
また、蔵の目塗りを忘れず、物をあまり詰め込まない。詰めすぎると、引火しやすくなるからです。

さらに、蔵を閉めた後、周辺の雑草など燃えやすい物を刈り取っておく。
蔵に入りきらない道具類は予め頼んであった知人の所に運ぶ。
しかし、もはや一刻を争う事態なら、欲をかかず、焼き捨てにせよと、事細かに述べています。

第52条「風吹きに遠出をするな」も、火事や災害を想定しての心得です。
享保年間の『家内用心集』も、暴風の日には遠方に人を派遣してはならないと戒めています。
風吹きの日には用事があっても原則断るべきで、
やむを得ず人を遣う場合には、その代わりになる人手を確保しろ、
いざという時のマンパワーを補充してから人を出せということです。
こうしておけば、万が一、出火があっても、人手不足になりにくく、
従業員も日頃からこのような考えで勤めれば、後悔や損が生じないものだと、教えています。

第53条「火事には欲を捨てよ」。これはごく当たり前の心得かもしれません。
しかし、出火して一度は非難できたのに、大事な物を取りに戻って、帰らぬ人となった…
という話も時々耳にします。

火事の時に、肝心の火の元を忘れて家財を守る、これも、欲に目が眩んだ結果ですが、
実際にその場に直面すると、理性を失い、判断も誤りやすくなるのでしょう。

また、享保頃の『鎮火用心集』も、「逃げる時に欲をかくと、元も子も失ってしまう、
大切な物は必要最小限に絞って、普段から荷車や長持ちに入れておき、
出火の際はできるだけ手軽にして逃げろ」と述べています。

欲に任せて荷車に積み上げると、避難路で競り合いになり、もたつくうちに、力も尽き果て、
結局は全てを捨てて、命からがら非難することになる、
そのような現場を何度も目にしたと、作者自身の体験から忠告しています。

「小言」は、火事以外の危機管理にも触れています。

第57条「戸締まりをよくしろ」。

諺に「家に鼠、国に盗人^{ぬすっと}」と言うように、どんな所にも悪人がいるものです。

先ほどの『我身之為』という教訓書は、「泥棒が入りやすい家と、入りにくい家がある」と述べ、それぞれの具体例を挙げています。

結局は、その家の主人や奉公人が用心深いか、隙だらけかは、生活の至る所に現れるもので、「盗まれるのではない、盗ませているのだ」と述べています。

昨今の詐欺事件を聞くにつけても、

「盗まれる者に油断はあっても、盗む者には油断がない」と肝に銘じておきたいものです。

第58条「夜更けに歩くな」。これには2つの意味が含まれています。

1つは、文字通り深夜の外出は危険だという意味。

もう1つは、夜歩きは「遊郭へ行く」ことを指したので、女遊びをするなという戒めです。

「小言」は既に第28条で「女郎を買うな」と禁じていますので、ここで再度、女郎買いにつながる夜歩きを戒めているのです。

第61条の「泊まりがけに出るな」も、無用の外泊を戒めたものですが、同じく女郎買いを禁じたものでしょう。

以上のほか、危機管理の小言が、随所に出てきます。

第62条「高みへ登るな」、高い所に登るな、第63条「雷^{らい}の鳴る時」、つまり雷の時に「仰向いて寝るな」、第73条「風吹きには舟に乗るな」と言い、そもそも第18条で「万事油断をするな」と戒めています。

江戸時代に用心すべきものは、大体、火事・金銭・博奕・色欲・酒の5つでした。

『心学図会』という教訓書には、「身の用心」と題してこんな歌を掲げています。

火の元と金と勝負と色と酒 身の用心をさっしやいましょう（2回復唱）

つまり、この5つにはくれぐれもご用心ください、という意味です。

火の用心より、身の用心。情報通信網がめざましく発達した現代は、身の用心がますます大切です。

次回は、160年前の「親父の小言」から、私たちは何を学ぶことができるのか、読者の感想を交えながらまとめてみたいと思います。

それでは、今宵^{こよい}はこの辺で。ごきげんよう。

【4日目】「親父の小言」が現代人に伝えるメッセージ／平成版を作ろう

小言が多いのを「小言八百」と言います。

「八百」は「嘘八百」の「八百」や、「八百屋」の「八百」と同じように数が多いこと。

『親父の小言』は81カ条ですから、それほど多いと言えないかもしれません。

しかし、多いほど効き目がないのも小言。なので、「小言は半分にしておけ」とも言います。

さて、『親父の小言』の締め括りが、第81条「悪しき事も、よしよしと祝い直せ」です。

この一条は昭和版には含まれていません。

小言親父は、最後に、「悪い事があっても、くよくよせず、へこたれるな」と叱咤激励したのでしょう。

「禍福は糾^{あざな}える縄の如し」とか、「人間万事塞翁が馬」と言うように、

善悪・吉凶は、常に変転するもので、一時^{いつとき}の判断で物事の善悪は決められません。

事態の成り行きもその人の気持ち次第、「善きも悪しきも心^{こころ}柄」という言葉もあります。

ならば、くよくよしていても始まらない、気持ちを切り換えて「よしよし」と祝い直せと教えているのです。

江戸後期の『心学俗語』という本は、「毒変じて薬と成る」という諺を、次のように説明しています。

薬はまさしく薬、毒はまさしく毒であって、毒が人の身を害することは自明の理である。

それとは逆に、薬は、人の身を爽快にする効能を備える。

しかしながら、時には「毒が変じて薬になる」のも、真実であろう。

例えば、他人が自分を嫉^{ねた}み、罪がないのに罪があるかのように誹謗し、周囲にも密かに言いふらし、

その噂が自分の耳に入ったら、さぞかし気分の悪いことだろう。

だがこの時、これは「己に用心せよ」とのお告げだろうと思って、慎んで受け取り、

誹謗する人を怨んだり悪く思ったりしなければ、身の禍を除けるチャンスとなる。

だから、他人の讒言^{ざんげん}も服用次第で良薬になることは間違いなく、

もしそうなら、我が身にとって願ってもない事である。

すなわち、これが「毒が変じて薬となる」道理である。

他人が自分を悪く言うのは、自分にはまだ欠点があるからだ

我が身を振り返って物事に対処することが最善である。

「悪しき事も、よしよしと祝い直せ」。それは、どんな逆^{ぎやつきよう}境も乗り越える、処世術です。

そんな人生の極意を、最後の小言にしたことにも、深い意味がありそうです。

ところで、嘉永板の「小ごと」を発見した半年後に、簡単な解説をつけた小冊子にしたところ、各方面で反響があり、多くの方から感想を頂きました。そのいくつかをご紹介します。

まず、年配の女性の方。

小言ではありましたが、人間としての成長には欠かせないものですし、何か温かいものを感じました。

私の父は穏やかな人で、あまり怒られた事はありませんが、

折に触れては、ここに書かれているような事を話してくれた事を思い出しました。

また戦争中、千葉県にあります母の実家に、弟と疎開をしておりましたが、

元治元年(1864)生まれで山梨県出身の、祖父と祖母がいつも厳しく、
ここに書かれているような躰をしてくれた事も思い出しました。

次に、元幼稚園園長の男性の方。

各箇条を1つひとつ読んでみると、味わいのある小言ばかり。

当たり前ようですが、その当たり前が日本人の背骨に、今でもなってるんでしょうね！

東北大震災の時、苦しい中、列を乱さず順番を待って支援物資を受け取る多くの被災者。

その姿を見て、「静かなる尊厳」と題し、日本を讀えた外国人ジャーナリストのレポートを読み、
感動したことを思い出しました。

それから、外国へ行く飛行機の中で、日本人客のシートが、他国の客よりも奇麗なことは誇りさえ感じましたが、
日本人として当たり前のことを、子孫に伝えてきた積み重ねの ^{たまもの} 賜 だろうと思います。

そして、教育関連企業に勤務する男性の方。

昨今、家庭を始め、親が子どもに“ものの考え方”を教えていないことについて、危惧を感じる一人です。

親としても自信がないことは理解するものの、

「お父さんは、こう考える」ということを、伝えていくことが大事だと思います。

81カ条の小言のうち、自分の信条として言えるものはいくつあるか数えてみたら、13ありました。

こういう言い切りは、気持ちがいいですね。

最後のコメントのように、自分の信条を選んでオリジナルの「小言」にするのも面白いかもしれません。
各家庭の「小言」なら、それはまさに「家訓」でしょうし、社長の小言なら「社訓」になるでしょう。

仮に我が家の小言を作るなら、

「一、挨拶をしろ」「一、返事をしろ」「一、履き物を揃えろ」になるでしょうか。

ご存知の方も多いでしょうが、「人生二度なし」を根本信条とされた、森信三先生の「躰の3カ条」です。
簡単なようで、大人でもなかなか実践できない事柄です。

「小言」を作っても、親なり、社長なり、言い出しつpegが実践しなければ、単なる「お題目」です。

森信三先生も「道徳とは、自分が行うべきもので、人に対して説教すべきものではない」と教えています。

また、「小言」は余計な説明もなく、一言で言い切る点が良いのでしょう。

一見厳しいようで、言外の愛情が感じられ、また、読んだ時にスカッとする。

座禅中に警策で打たれた時のような、ある種の緊張感や快感にも似ています。

とにかく「小言」は、本質を突く、短い言葉が命です。

いずれにしても、160年前の「小言」から、多くの人が日本人の心を感じ取っているようです。

特に、対人関係を重視する「小言」は、江戸の「もてなし」や「ふるまい」の心を、
現代に伝えるメッセージと言ってもよいでしょう。

小言親父が現代に舞い戻ったら、何と云うでしょうか。

苦もありや楽もある。だから人生は面白いんじや。

若い衆には81カ条は到底守れんだろうが、少しは心掛けてみなされ。ふおっ、ふおっ、ふおっ…

——これじゃ、ご隠居風で、違和感がありますね。

苦もありや楽もある。それが人生ってもんだ。

苦しい、辛いて泣き事言ってねえで、これだけあつたら、お前さんにも一つぐらいできるだろ。

少し気張ってみろ。そのうち、今の苦が屁でもなくなるぜ

——こんな感じでしょうか。

さて、本来、無名の「小言」を国民的な格言に引き上げたのは、
紛れもなく大聖寺の45カ条であり、暁仙和尚のご尽力によるものです。

そして、今回の嘉永板の発見は、
江戸時代の文化や歴史の痕跡が、意外と身近な所に残っている事を示す一つの証であり、
江戸文化の奥行きを感じさせるものでしょう。

私は、縁あって江戸時代の「小言」と巡り会いました。
小言親父の気持ちを忖度しながら、これからもあらゆる機会を通じて、
「小言」の心を皆さんに伝えていきたいと思います。

そして、昭和版45カ条にしろ、江戸板81カ条にしろ、
「親父の小言」が時空を超えて語り継がれ、
近い将来、その文言が「ことわざ辞典」に採録されることを密かに願う次第です。

それでは、皆さん、またいつの日か。ごきげんよう。